

地方だより

気象庁海洋課



1959年6月24日薄明、凌風丸は初の深海採泥に成功した。

観測船凌風丸が本州東方洋上の海洋観測を行なうようになってから、もう8カ年もの歳月が流れた。たゆみなく鼓動するエンジンの音や、砕け散る波頭に耳や眼をうばわれていると、観測生活はモノトーンそのもので、四季の移り変わり以外に一見何の変哲も生じて来なかったかのような錯覚にとらわれる。夏には白昼の日射しを受けて舞い散る飛び魚の群、また冬には烈風のもとで生長する大波の渦と、その中で百葉箱にまで垂れ下がるつららの数々、そして日に8回の気象観測と海流と表層水温の測定、また2~3回おきに停船して行なう深い層の海洋観測、一見すべては数年来の繰返しのようにさえ思われる。しかし、事實は、時代の移り変わりと海洋調査の歴史とがこの凌風丸の観測航路を支配し続けて来たらしい。以前には1,000米の深さそこそこであった海洋観測

も、最近では大洋底、さらには海溝の深みにまで到達する深海観測までも行なうように形を変えたり、時折りは大学などと共同で、深海底土を採取したり、大洋底よりの地熱を測定したりもするようになった。いわば凌風丸は海洋気象観測船という今までの装いの他に海洋の総合調査船という新着の装いをも身に付けるに至ったのである。そのようなわけであるから、この凌風丸の観測調査の遂行に観測者側としてタッチし、収集された試料、資料の整理、解析も実施している海洋課の人々全体が近來とみに多忙となって来たのは当然のことであるかも知れない。早い話が、海洋、化学、海洋生物の3係と海況予報及び業務2係の大部分の人々は、それらの仕事のために、三陸沖ならぬ海洋課内をも走り回っている。そして、水温分布や海流など、物理的諸現象の把握の他、プランクトンの分布を利用しての水塊区分とか、原子力利用に関連しての放射能の調査などが凌風丸を使用しての海洋課の主な調査業務になっている。また、東京湾の水がテムズ河に通じていることが古来変わらないように、古くから重用されている潮位表の編集で知られた潮汐係の潮位推算業務も歴史とオートメーションの波に乗って、ケルビンの推算機より電子計算機へと鞍替えを行なった。けれどもこの係には何せ高潮やチリ地震津波のような海千の相手がある。負けず劣らず天手古舞なことに変わりはない。このように一つ一つ数え上げてみるとどうやら軽い疲労さえ感じる。来年はまた印度洋の国際観測に参加も予定されているし、海洋課の業務はこれまた海のように広汎な内容を持っている。

(海洋課 文責 吉村、井上)



海洋観測1500回達成の記念撮影